

井筒俊彦全集

第一卷

アラビア哲学

1935年—1948年

慶應義塾大学出版会

びろそぴあはいこおん

—philosophia haikōn

海は暗くなつてゐた。しとしと時雨の降る日海岸の砂に天井を向いて寝てゐたら、まつ白い土人がそろくとはひ寄つて来てこんな事を言つた。私は東へも西へも平気で飛ぶ鳥になつて蝶々の夢が見たいです。昔あなたの国にローシとか言ふ人がゐて、その弟子にバシヨールとか云ふ人がゐましたっけ？ 万物は流転して一理ありますか。あなたの国では分らない人が多ぜい居るさうですね。私達は生れるときから知つてます。うかくするとイカルスになると云ふことぢありませんか。海でもだめ、空でもだめ、あゝ！ 地平線が恋しい。僕は答へた、あゝ僕も地平線が見える。だけど、僕は海が恋しいんだ。おゝタラツタ。タラツタ。ふと見たら白い土人は何処かへ居なくなつて、大きなALBATROSがグルく空を旋回してゐた。そしてマラルメの笑ひを笑つてゐた。——(虚実

論)——

(「ひと」一九三五年一月)